

入るを量りて出ずるを制す

ルカによる福音書 14 : 28～30

あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけって、『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。

最近、浅知恵の政治家がよくこんな言葉を言います。「そしたら、財源はどこから持ってくるのですか」。私たちは日々の生活の中で、多くの選択と決断をしています。お金をどう管理するか、何に時間や労力を費やすか、将来に向けてどんな対策をするか、等々。そのすべてには、「入(い)る」と「出(い)ずる」のバランスが関係しています。

「入るを量りて出ずるを制す」※1という言葉は、計画性と慎重さの知恵を教えています。つまり、自分の手元にあるものをよく見極めてから、それに見合った行動を取るということです。これは単なる節約だけの話ではありません。

神の国を目指して歩んでいる私たちにとっても、信仰の歩みにおいても深い意味を持つ言葉です。

ルカによる福音書 14 : 28～30 で、イエスは「塔を建てる人」のたとえを語られました。

イエスはここで、「塔を建てようとする人が、まず腰を据えて完成までの費用を計算するのは当然だ」と言われます。計算を怠り、計画（見通し）も立てずに工事を始めてしまえば、途中で資金が不足し、事業が頓挫することになります。

これは私たちの人生や信仰生活において、熱心さや理想だけで突き進むことの危険性を教えています。塔を建てるとは、ただ大きな夢を描くことではありません。それを「完成」させるためには、現実的な計算と準備が必要なのです。イエスに従うこと、キリスト信仰者として生きることも同じです。何らかの代償を支払う覚悟がなければ、途中で信仰を投げ出してしまうことにもなりかねません。

つまり、信仰とは付き合いや無計画なだけの思いではなく、個々人の認識に基づいた究極の選択なのです。「自分には何が与えられているのか」「自分はどこまで仕えれるのか」「どんな支えが必要なのか」と真摯に問い、入るもの（神の恵み、賜物、時間、力など）を量ることによって、出ずる（行動、犠牲、奉仕）を正しく制する——これが霊的な知恵です。

これはまた、神が私たちに求めておられる「誠実さ」とも関わります。神は、私たちが多くのタラントを持つことよりも、「持っているタラント（才能）をどう使うか」に目を向けておられます。

微力であっても、それを正しく理解し、御心に従って用いているなら、主は喜ばれます。反対に、大きな力（タラント）を持っても、それが無計画な自己満足にすぎないならば、主の御前で実を結ぶことは絶対にありません。

「入るを量りて出ずるを制す」とは、神から与えられた賜物（タラント）を軽んぜず、謙虚に受け止め、誠実に活かす生き方です。それは神への信頼と責任を伴う信仰の姿でもあります。

信仰の道においても、私たちは塔を建てる者です。その土台はキリストであり、設計図は神の御言葉です。そして、必要な資材と力は、祈りと御霊によって備えられます（普通、これをなかなか理解することができない）。

主に与えられた「入るもの」を感謝して受け止め、それに見合った「出ずる生き方」をしているかを考え、神の御前で実を結ぶ者になりたいと思います。

※1：この言葉は、中国の古典、五経のひとつであるの「礼記」の「王制」に登場する「量入以為出」に由来し、国家の予算編成の心得とされています。この言葉は、江戸時代の儒学者であり、江戸期最高の指導者として称えられた細井平洲の教え、「嚶鳴館遺草」に記されています。「嚶鳴館遺草」は、上杉鷹山をはじめ、各大名に贈った藩政改革のためのテキストとされ、現在でも国家財政や地方財政の運用の原則（収入にあわせて支出を考えなさい）となっています。

【参考】上杉鷹山の言葉

自助、互助、扶助

米沢藩の政改革を行った江戸時代の名君として知られる上杉鷹山（うえすぎ ようざん、1751 年 9 月 9 日～1822 年 5 月 3 日）の「三助」の思想です。

- ・自ら助ける、すなわち「自助」
- ・近隣社会が互いに助け合う「互助」⇒「共助」
- ・藩政府が手を貸す「扶助」⇒「公助」

具体的には、「自助」実現のために、鷹山は米作以外の殖産興業を積極的に進めました。また、「互助」の実践として、農民には、「五人組」「十人組」「一村」の単位で組合を作り、互いに助け合うこととしました。特に、弱者（孤児、孤老、障害者等）は、五人組、十人組の中で、養うようにさせました。また、一村が、火事や水害など大きな災害にあった時には、近隣の四か村が救援すべきことを決めました。天明の大飢饉（→江戸時代中期の 1782 年／天明 2 年から 1788 年／天明 8 年にかけて発生した飢饉）では、藩政府が「扶助」として、藩士、領民の区別なく、一日あたり、男は米 3 合、女は 2 合 5 勺の割合で支給し、粥として食べさせる対策を取りました。鷹山以下、上杉家の全員も、領民と同様、三度の食事は粥とし、それを見習って、富裕な者たちも、貧しい者を競って助けました。

参考：童門冬二「小説 上杉鷹山」より

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり

これも、上杉鷹山の言葉で、「どんなことでもやろうと思って努力すれば、必ず実現できる。逆に、無理だと思ってあきらめ努力をしなければ、絶対に実現できない」という意味です。

上杉 鷹山

江戸時代中期、米沢藩（現在の山形県東南部置賜地方を治めた藩）の藩政改革を行った、9 代目藩主。鷹山は藩主隠居後の号であるが、この名で知られる。